

# 童

2018年12月3日。

温かい秋が続いています。今年の秋は、長くじっくりと楽しめるような毎日です。大地の地面は落ち葉で埋まり、11月に敷いたチップの上に積み重なり、ふわふわの柔らかい温かさを味わわせてくれています。

雨も少なかった11月。紅葉の秋をたっぷり味わいながら、子どもたちは連日かねちよろ土手や田んぼや林を歩き回りました。そして、新しく生まれ変わった大地「高社の丘」。この「12の月のおくりもの」の丸太で食べるお弁当やおやつ、更にここで聴くお話の光景を見るにつけ、心から幸せ感を感じました。

今から約30年前、レストランサンクゼール（教会のある見晴らしの良い）ができた時、こんな良い景色になる場所がこんな所にあったのか！！とその先見の明といおうか開発力に驚き、「いいところに目を付けた、さすが見通す力があるなあ、何であんな藪や林からあんな景色を見通せたのかなあ」と驚いたものです。その想像力はすごい力だなあと思うと同時に、田舎の人たちはそれが見通せなく、簡単に土地を手放してしまう危険性もあるなあと感じていました。

大地もそれを教訓というよりも見本にして、景色、環境、樹木などを見通して、従来の常識などにとらわれずに、今置かれている環境を十分生かせるようにがんばろうと思ってきました。変なコンプレックスですが、やはり都会人や大手デベロッパーは先を見通すセンスがあり、田舎の環境や自然をうまく生かすセンスや先見の明があるなあと感じ、逆に田舎の人たちは、それを生かせず気づかず、ただ不便山奥だなどと従来の都会志向を持っていることも多いと気づきました。その意味では、隣地のサンクゼールには感謝であり、そのセンスにたくさん学ばせてもらいました。



幼児の特徴の一つに「模倣」があります。教え覚えこませるのではなく、良い見本がたくさんあること、それだけに、大人も環境も自然も先見の明をもって研ぎ澄ませていく努力を続けていくことが、最高の教育だと痛感します。

## 【森を作る】

大地の森第1次2次整備事業が終了しました。その環境見晴らしの変化は、まさに大地の第2の歴史、世代交代を感じさせるものになりました。東斜面カラマツ林の伐採、スロープ下の開園以来の運動会で回ってくる大木の伐採は、大きな決断でした。カラマツは、青ちゃんが小5の時に、リンゴの木を伐採して家族で植林したものです。スロープ下の木は、大地が開園した時、日陰がないので、「この木何の木 気になる気になる・・・」という歌にある木をイメージして、直径5センチ位の木を引っっこ抜いてきて適当に植えたものです。それが年毎に大きくなり、多くの子どもたちが木登りし、運動会で回ってきた歴史あるものでした。まさに、これらは、自分の成長、そして大地の歴史とともに歩んできたものでした。

還暦とは、もう一回生まれ変わる、新しい自分のスタートだというように、自分の歴史人生でもある大地の一新も必要ではないかと考えました。

カラマツ林は、その成長が大きく密になってきて、逆に暗く東斜面東広場がじめじめ（夏は最高ですが）していることが多く、全体的に深い森になりすぎてきており、やはり散髪が必要になってきていました。スロープの木は、ハルニレという木ですが（知らずに植えた）、枝ぶりが悪く、黒くなり枝折れが多くなっていく樹木であり、最近富に、黒く折れてきていたので、気持ちがあまりよくなかったこともありました。どちらも、長い間の感謝を込めて、お酒と塩で清めて伐採させてもらいました。それらを全て大地の土と空気に還元するために、チップと薪にしました。

心を込めて大地建設時の気持ちをもって、この作業をしようと心がけました。チェーンソーやチップパー粉砕機の爆音は、ありがたいことに大地の周囲の迷惑にならないので、早朝から夜まで心置きなくできるし、薪き割に至っては、ヘッドライトで朝3時ぐらいから、ヘッドホンで音楽を聴いたりしながら、暗闇を楽しみました。久しぶりに、夜明け前から夜までの労働。夕ご飯を食べてそのまま眠ってしまう、時間を見たらまだ7時とかいう生活。上半身の筋肉も、しっかりついたような気がします。食欲もすごく、甘い飲み物も欲するような毎日でした。

山仕事も農業も、やはり地味で忍耐力が全てですね。機械でほとんど賄えると言っても、その機械を動かすまでの準備や機械処理した後の作業は、やはり忍耐作業です。輪切りにされた丸太の量を呆然と眺め、これらを薪割機で一つ一つ割り、それを軽トラで運び、積み上げる、この行程を一通りしないと、次の伐採が進まないという過程の中で、分業制があり、木こりの鹿島さん（大地 OB）は、伐採のみで、その後の処理全ては青ちゃんの仕事と明確になっているだけに、それぞれの責任が明確化されていました。それだけに、作業の進み具合は、青ちゃんの処理にかかっているけれど、美しい森に、環境の変化が見えていくという非常に、創造的なわくわくした毎日だったわけです。そして、忍耐力も、毎日続けば、当たり前になり、膨大な輪切り丸太を見ても、黙々とこなせば処理できること驚かなくなりました。農業でリンゴの摘果や稲作のハゼかけ作業で、年配者が毎日やっている姿を見るにつけ、この忍耐力は、それを越せば忍耐ではなく、地道なもの「千里に道も一歩から」の境地に達するのでしょうか。

新幹線、スマホ・・・などなど、全てが快適に早く、短時間で、能率的に という短縮こそ科学の発展、生活の向上という流れ、風潮の中で、ますますこの地道な作業、忍耐などが、時代遅れだったり負の面だったりするイメージがある世の中を感じます。大人は便利さを追求、科学の発展を享受するのはいつの時代もあるわけですが、それが今や、子どもと大人の世界は根本的に違うのに、その子どもの世界にまで、それらが侵食していく現代社会、もう大人も子供も見境なしに、子どもは大人のミニチュア化して扱われていく時代は、本当に悲しく哀れになります。

お話や絵本にしても、デジタル化、スマホでお話・絵本 などと堂々とマスコミが流しているし、子どものしつけも、今やスマホのゲームやアプリで行われていく時代。先日驚いたことに、歯磨きアプリというものが爆発的にヒットしているということで、親から感謝が絶えないという記事に出会いました。ゲームで磨いた分だけ、何かをやっつけられていくらしいです。結局、子どもはスマホを見ながら磨いているらしい。親は、ゲームに感謝し、自分のしつけの役割を放棄して、スマホに任せているという構図。スマホがなくなれば歯磨きはたぶんしないでしょう。これが未来のロボット社会なのか IT 社会なのか・・・ 人間の会話や怒鳴り声や感情の起伏のある声やささきやきなくなっていく、穏やかな叱らない子育て、感情的にならないしつけ、何もかも静かで穏やかで見守るような育児が最高だという風潮に、これらの IT 育児が加わりと更に別の意味で、感情のない世界が蔓延していくようで背筋が寒くなります。

雷頑固おやじ、肝っ玉母さん。おせっかいなおばあさん、口が悪いが愛情深いお母さん（小公子 小公女などに出てきますね）などが、どんどん少なくなっている世の中、そんな人たちがたくさんいる中で育ってきた大人たちは、歪んでもいないし、いじめも登校拒否もアレルギーにも縁遠かったような気がします。

労働とは、手を汚すことが真の労働と呼べることだ という生き方を、子どもたちの示すことが大地の使命です。